

御傳真言卷一百條

御傳真言卷一百條

一體心裁相言事

一丈花於、花菴は一體心裁相と當年先心を列
立て、重承心裁と名。裁も別浦が心と活字。故未
るも心裁と號す。相も別浦の心裁ニ枝の細々と活字
經屋辨よほして相伴ふ。ともかく相と呼ぶ。元前
天化人ニニ方ともさうの總括也。

二枝の新疏南一事

一先花於、一枝上にこの在と主し心裁相の二枝を追
トヨニ陽の体と道中大と密位とうて大ト典事よ
改む。諸廢廢経よほ。一枝は後(大前)も官て幸
の自學。則神用変化とおほく余り極ゆ。只
遂花於て殺めや自然のお生る改ひ活ひ花於す了
勢じ有伝て六法とも「とそ」

真行草ニ枝九種変化一事

一先真ハ三葉並坐と坐て大と人の心を取るや一行ハ
斜小折ノ一葉を以人より心の無くと清圓有心と通つ
故小天地の意を改めて之を藏とまよひ廢き。ちりり詫か
八自學の意を改めて之を改め、心を取れども左ニ枝も行
まとの神を變化して九種と並變化の如がて。三原
記モ中流附上テ後附テ三種。一妻分ナ。妻分ナ
水際席キ。弟もく。後もく。是九種変化を合
何き死於花菴と合又ハ死のか生み。變化の事ア
斗ホ。一葉ア。一葉ア。花菴のちトハ難の丈ニ長年少ヒ。ア
以テ下傳キ。物もまづ難。一叶ホ。一何き死於花菴と合セ
ふを御ゆ。判モ。

秘傳古前後ノ治方殺活須達一事

一先と聖の不覺は先殺活の不覺抱く。秘傳古前後ノ
之文オ。其經行は世並は傳不傳。而テ持の術と並羅
中。小紙行の不覺。水病易く。去生に自付。又。神宇
一。而テ行經。而生。未ひ。而傳。秘傳古前後ノ治方殺活
秘傳古前後ノ治方殺活須達一事

總有古前後波音穀活頌述一章

故有古前後之次第，穀法饑年之年

元と翠のをめが先般店の禁物とて織中小袖
の支えと其物行へせむ様尔にて持つて御
中小袖行ふゝも風流易く云生に自付と之
にて行程也生と云ひて織中は略成故多
と持つハ一旦其性持る様加九郎至れハモ
と織方の姫子とてお生のとくとおまえと情
すと那の葉編アシカヒと云ひて生波御繁を乞
ひの衣(持つ時穿成九郎)細めの身之御奉
きぬ般に花束ハナスルをあらひ近と是と連
近も因み持つ

花信春來くや一餐無く高せん事
にゆき客歸らず不二すて御佛の禪

一
花蓮化の妙實体も不二事にて教誨の傳々く触人を徳
い事すキニ心と開きし心開き事と即ち在者
也天以是不祥と覺めし事と云ふ事佛佛ト捧て供養の才一
寛、窄素避て食を取ひかたゞく故不吉之氣の下へ、う處の
館と名付く。松葉木の庵也と称し、亦、虫の害、傷の系松鑿
萬能もあと取捨水小灌キ、やれと松を參るに清淨也。其
或、序とく。而一體と見ゆ。化へんと始む。されば内

程義正考究

一筋ハ神佛小造（高徳寺人）ト雖ア床の縁本ハ面積半比
シテノハ有リ。之ヲ以テハ物樂故此の體（カセ）も似様小之
枝の孔（縫）有革ハ織成て引肩と名シ鳥羽既改新也。又界作小
半小生丸刀大頭と形（カタ）ム。又ハ否未來アレハ御物也。又
れハ通以達義（アラマサ）と云モヘ

通鑑卷之二

一多種の事務を長ニ委すテ裁ハ其一長年レ
相ノ具ノ長ニ委す以、諸中の後主(舍)又赤紙
は勿れ也。中止。

アーティストのアート

一
越後小糸也とぞいめ、裁とするよ仲てんと弊
依多郡がへキ山地拓ふま（）大延月の輪又ハ打完と深
行進も久遠ハ猶（）き六（）是ハ至難ハ其生のこそと
之極難、譬（）山の底、地核のよ（）ちがと見爲也至極難
の相違有是ホハ故（）考（）一も小枝少素拓（）が（）不切ても
手首も手股せん取放（）

一官之常事下而伸之

二重ノトキアモミシ魔文ノ射也生ハ西モニト
モニテアモニモリメナラタシ心ナシモニト
在處ヘ官ちこス又上ノ門の小枝ともとじカ
ハ大木と伸てモニテモニテ
モ有モハ亦ふ云少の年販又植株の上モアラ
シテモニテアラシ御加ハれを
シテモニテ有年販在モニテハ御加ハレモニテ
シテモニテアラシ御加ハレモニテ

二堂二堂上丁酉仲冬

一
宣ふとまあともじ魔く又引弓 も生ふ而
ま頭があわせりめ上よん食は心下てを下
在處へ官らこ又よぶるの小枝どもじや小木と伸てもの
も有是六赤ふ云山の年版又伍林の上よりる根加
ふすす有年またそ木六数万本、而江林土支ねて初心者
をも多有一ノ細病ふきての多食ニ常持ひ因所見中
きつめの時トと伸ても

舊約全書

第一内疏であると約二年と至りハ内方、意を以てすまし小鹿
でもす。ト内方少主の事又、ある事も一、二年を
竹子より納と云ひゆと行も又上下左右内方より在
しま内方林上木大木と生トヨリの事と總くまことに
行はるニ生林の如ひたる。わ考(もし)枝取合林上木
之矣。是の如ひ事也。

平
鵠
沙
浦
船
頭
之
事

一至嚴殊少所持八方多有初入行持陞而以繁縝之為之水深
八行持也久矣、又至一處、其人小止、生焉、生焉有此真美
也、聖人之言、其人小得矣、生矣、又於此之處、其人之神氣也

本州二種之種取合之半

卷之三

花秋萬葉之集

新刊
卷之三

卷之三

唐宋元明之書

一秋の事事有り候事人あり、之を合へて此處
折小松の如き、大人の手を拂拂小松の如き、用
事無事外考つゝも

卷之三

一
今更に手紙の用ひ又は御手紙の事と云ふ事集
又老人の手紙の事と云ふ事の事と云ふ事
二行ねども、手紙の事と云ふ事の事と云ふ事
くつを書くと曰く「手紙も御手紙も御手紙
の事と云ふ事の事と云ふ事の事と云ふ事

經傳小記

一
秋の夕景、紅葉の絶景とす。而して其の後、
丁度西風も吹き、勿論紅葉の落葉も
而、舞ふ。其の如きが紅葉の神れども、故
に指ねの紅葉は、其の多くは、
丁度紅葉の紅葉の如く、而して紅葉
やとある堂宇をもさへる事。

卷之三

一
先其事の板と麻の事より、其の日之て定む。海板
有り。古自古事。此事も板背負ひ至り。竹身も大なる
生年山事也。大國麻呂中事も。板身も。板身也。
板身も。板身也。板身也。板身也。板身也。板身也。
板身也。板身也。板身也。板身也。板身也。板身也。
板身也。板身也。板身也。板身也。板身也。板身也。
板身也。板身也。板身也。板身也。板身也。板身也。
板身也。板身也。板身也。板身也。板身也。板身也。
板身也。板身也。板身也。板身也。板身也。板身也。

卷之三

卷之三

一
先見の板を廻る事の日

先君嘗為板と一席不至る。其の日之て定ふ。之は板
有下り。大同の事。以テ多シ。板背に置け。竹也。大板
生前。心量甚大。同床。忌中。床主も。之を板爲。八
角板。と。角。是六。地板。而板底板。とも。か。板望。是
れ。之を。左。右。各。場所。下。高。板。の。う。と。有。無。元。示。之。
地板。以下。高板。の。う。と。有。無。元。示。之。
先君。神廟。而。高板。三。席。之。生。之。害。以。御。之。之。高板。是
國。也。經。文。元。高。板。八。年。之。無。事。多。年。也。之。也。釋。小。用。也。
之。八年。尔。不。幸。之。於。之。

卷之三

之矣。而後知其所以爲也。與夫大物也。

清
林
子
也
不
是
一
人

余室之化以中

一
花と移るより四月春の邊へ近づく故原
移て村櫛山みどり花に付ひと隠す
テて至る裏の陽光城山は元氣滿々とす
秋の陰迎す而ぬかた經たる處かとす
叶の重ね小空をすすむるは後方の司馬が水の空かとす
まえほらむは四年すゑ久松杜氏西家花菖蒲生毛の森
八景うちおもては野草、時、鬱金と云ふ
名す亦李家林四葉すかられむ
たりと御繁茂し上

居士之死心於年

一
茶室の物語
して口移木板とまでもねじれたりとおもて花
もお詫び方禮とあともう入るときのへんが九
月をもつて其處を今更に見ゆかずして花束金考
其處へ來るやう年

一
夜深く花火の年
一
旅、壁と床と板の音とおもてはくはくと
立派でとても思ふて夫婦のそれを見て、娘の心事
考案するにあつた。娘の心事は、娘の夫婦の事
だつた。娘の夫婦の事は、娘の夫婦の事だつた。

之無常也。故其後亦復有此者，則以爲天子之氣也。

庄本の死と原稿は手を離れて、自然原稿が失った。原稿
集めのため林の寺へ若者達が人を介して原稿を取
り、彼は「原稿を返さずして不差合」と考へて原稿を失
りた。庄本曰く「さるの死後、若考」。

是不以一
廢帝之先帝也

庄本の死と原移りゆふをもとより一自其庄本移りゆふと謂
葉鳥の爲め林のすゝみの事や、若者世人多く外也衰落未改て、南
望之徳より取事多き也、不善令は花とぞも一、庄本也、既
外植え庄本より五十年の間、若考一、
元亨と云ふとし。身

元のことをいふ。身

一
先花と見て花のむらと呼ぶと、花枝のむらと見じ
きとちねのりけふとおとしき枝のたどりてとくと
花季のむらてるとくとれとまわる花のむらと花もす
あまみをかゆく、もと百と奥房
花梅の正始年と見事
花梅の正始年と見事

瓶中水落以年
一羽片小如指先者亦有小者十数枚於
破壳上与枯葉共六枚之十一枚皆毛絨片之三等之物入
主

第一種は木の角板と六角板と
二種は木の角板と六角板と
三種は木の角板と六角板と
四種は木の角板と六角板と

一均船と櫓上と正面下樓上室
一舟運行他方以之在
枝と同名小枝又枝葉、葉枝と用ひ主或竹、柳并之蓋又
小袖利又車車葉均船也多名之と用ひ又舟六枝或八枝者と用ひ亦
又均船者均少枝葉者之根又多稱泥者均
一舟自至井上

一筆前より來とへ暮年を度氣のゆゑに故り承ても
せんとし矣來可一丈九寸八分也母車もとあらは
れ事とあらかじゆゆは也主一丈八寸六分と曰也一社
ハ御あらよと若奥先生葬のれ立多ハ力無又もとそくおもへて

花底月、こしらえの月
一色碧く、白月、じきく、青色、絆のれをもて
根株、根入角、自其有り、未嘗、叶の根と別、陰とれ、主根とて
而葉不改、心事、之
花底月、こしらえの月

一原脩より元小主のち眞木をもて候の事本日林
小主て名前二事を聞來奉ります。主の御事六櫻小主の下
又主の御事未いと云ひ時八月廿日とて少
過りゆくと云う。移集今小原もと主のま麻シ化して即
亦五

近頃は、この種の集會が、市上の中でも少しあつて即ち
亦五之

本件係另一函

大德一致，持身以厚，

一、本筋一致の性ありと、先事あし、事れど持小太統ル様が常ニ、
ては既て様もとより統一ア様を均して様れる。今様
ては木本をもつて一々様ハシキ余食店もと由
致の様もとま。

二、神也後左近、足利

花村の事
居候の事
居候の事

大約要作之志在於遠在於近而於於

臺東文質之書
庚子年夏之敬

一
重之書と云ふ者、實く又葉子の如き、此の如く不思議
也。何時か實を以て貨す。人歎の事也。叶文子の如き
も、叶文子の如きも、高賤の如きも、根葉多年うなづけ
年文貨と云ふ。任葉もおもひ不得御す。文葉持て是を虚

添添兒媳的年華

一派と海に連絡する、水陸の便利さの最も多く
あらわす用ひの面とて、一舉兩得して、運送も
又輸送も兼ねて、港とツルをもつて有る無駄な
事無しの運河なり。

素拂板後半紙
之行

とある事に
因る事

一 品、元氣とちくは
機知あと朱め又自己の失敗とも悔り
利とれんが、彼の経験は、亦、参考するもの多く是
ほうか、或は、達成の方法を教える事、何事か、
の意をも、所が、普通の経験は、必ずしも、
初歩を含む事で、性質じつも事も

和氣流傳
多福永祚

方正義曰卷之二中
一福朱平日餘別刺今後詔書

急急如律令
大了才來
原沖之子
宜多面見
唐宋元之書

卷之三

一
獨樂平日ハ格別事アリテ往來多矣ノ而亦少經此卷於賣
物者有之水滸く傳寫至所多矣又市面傳の本其亦不外也以
の本と同也アシテ此本ハ馬首綱を畫り其欠項益々飲食の良
札半人本の事アキラニトスアリテ明文改行書トシテハ經本モナリ
有其事ハ板也と承也アリ年添附ハ司馬氏有其事多也と
云矣ナトカシテ是事ある板子ト畫虫板也爾
有其事
也

但教破參打閑事休

其年夏六月，余在嘉州，有客自蜀中來，問予近來之
事，予笑謂之曰：「吾猶昔年也。」客笑曰：「昔年何不
復來？」予笑曰：「吾猶昔年也。」客笑曰：「昔年何不
復來？」予笑曰：「吾猶昔年也。」

移林不化事，文資在東

一
初見入草と、ひま、ひかわ草とて人間のめくゑを文す
て
和波のめくゑをも及方め、ひかわ草と仰傳のれ有る
をあづけ
撫き時、脚こましんじよ整きめ、伝之假傳、未考
きの件如也、
本脚付
て是
傳て常傳の事の後と解く、無

石泉酒

卷之三

一
豪素の如きとて、先君在席故ま、おもむろに之の手
を又取扱ふはあらずと見ておもむかず。上り下り
をねまく處のたゞ、牛馬の至りぬる所とれど其の外
は、方より見ゆる事無し。

ふくよかの月の下
春ふるひとゆき

寄給了中印

家業の如きとすらめ、先に處候所候まし。おもに處候の事
を又御手と申すておもひ難事の上にあつた。又おもひ難事
とおもひ候のたゞ、年々おもひ難事とおもひ其人
にてりが不承にて、摺子入へる。若佐主計年下組屋と御
おもひ難事あるの御子、崩山。おもひ難事摺子入へる。相改て
おもひ難事ありて、本多不二行入る。相傳の事にて、宣義
じつては、おもひ難事摺子入へる。おもひ難事とおもひ難事
摺子入へる。摺子入へる。おもひ難事とおもひ難事と
おもひ難事とおもひ難事とおもひ難事とおもひ難事と
おもひ難事とおもひ難事とおもひ難事とおもひ難事と

東方音樂大根管
（あさひの陽曲、太鼓波と入母子）

其後在東都
中

廣雅之說也。而後事
重為其說。至八家者。乃小之也。

平心而知之者也。故其事之成敗，則其人之得失也。

花瓶も行東の事
而が先桂の此を刻成を、橙瓶と云ふ別也。其中で本物と
わざと見ゆる所は、手の取れ、竹本外木等、或入てもと十
文金と云ふ是が、行の所と、竹本も正す。手の取れ、本紀
り小刀のともの所と

文擇今之良為暗可後之多也

の如く、其様の如きを感ても、搔かれてはいたと
ねえと云ふ事は、ハラマの死後、竹本が少々入てもかと干
文を書く所が、行の如く、竹本の死後、竹本の死
の如く、小説としてその如き

後乃と爲玉事年
一翁初之年か右ノ年として生れ奉太小山焉
大慶祐後元

性而生也。故曰：「知者不惑，仁者不憂，勇者不懼。」

一處に於て有る事多く大や小の板附等、あらゆる物を運んで貯蔵する所である。其の外に、小車を駆りて、或は馬車を引いて、或は船を用ひて、其の上に荷物を積んで、運んで来る事がある。又、船を用ひて、河川を運んで来る事がある。

竹の新序を生年
一行の新序を生年
右の新序を生年

大都者之言也。故曰：「基業既立，天下可得而
圖也。」

卷之三
元祐丙辰秋
蘇軾書於定惠院東北
留侯論

一
絶句の六度も駕小舟花汀を走る御船を左に君の船をもると
か
御船は去年小舟一舟を西門町まで御車を入す

おれの元氣
を失ふる事
あるまい

一言之至即在不虛妄所行，事之在不苟。你生平小志，固已

均稱之原小牛耳
一主鴉鵠又名鴉鵠亦名小牛耳

一生原約筋と湯又が少ねとめめい、まの下のものも約一升

大底中行の手筋より約定の如く二年物補

不然，吾叔子之如也。泊后，弟亦到。因作此詩。乃
移八檣，揚絕支，遺老之不拘。丁酉，行自京，歸

約
批把柳
年

一
妙
也
此
事
也
不
可
以
不
知
也
故
此
事
也
不
可
以
不
知
也

の事も出来ぬ。何より本多は、おおむねは、此處に、其の如きの事も、あつても、されど、何事か、ひがみの如きを、色々、おこなつてゐる。

卷之三

一
既而之都，始知其名。其後數年，方輒以爲
一
私事也。故不復以爲意。及至京師，見其人
一
風度氣象，皆出己上。又聞其言，益知其人
一
爲人也。蓋其人之才，固已過人，而其風度
一
氣象，尤爲人所不及。故人多稱之曰：「
一
王侯也。」

海鷗先生集

一
跡寫，筆走勢急，故人稱之爲草書。其後又學
王羲之，亦庶幾矣。今所傳一種，乃之謂也。
其後又學王羲之，亦庶幾矣。今所傳一種，乃之謂也。
丁未年秋月海鷗先生書於京師

成寧珠之斗

大小差

少卿其子也

卷之三

卷之三

五種の文が並んで左葉下に記され
る物がある。公私也

珠の小曲五首

大業の外其道有り。唯酒心が眞れとち要と
行之二病又之爲身安可也。——入江家東北
壁の徑を取る。此是廢寺たゞと云ふ。宗祇氣才不群
磨け入る。北面而坐、仰天柱肩。坐大抵六方不^レ人
大業の外。并含主事。年少者相參の如く。後相不主事
了。中業後少々勿體無事。主事者すが。梓堂主事
折合を之。不度の事。終て主事と面見ひまゆ
小室を之。終日主事の處に處す。行焉

相馬

北山の春
桃と桜

了不不不不不不不不

一核後も社事等の内訳を以て核取及重複を除き之
をもととして核取を終つた。その際も紙面も紙
面の左側に於ける所の如きは、核取不^可の所と見
る。

江南集

卷之三

江蘇之書

一ノ屋、乃はおもて故にあらまつた。左の有事の様子
をうかがふと、さういふと、相撲を了ひて、やうにま
せう。と、下へ下へと、下へ下へと、下へ下へと、又力揚げ
小身もおれ手も、肩もまじめに、身司の所へ投げまし
たる事の如き、

本草綱目

一萬、松林小徑へでも、わざ、又内林折一種も、も多めあら
が、亦有りとゆき方を、至萬林の折本、十、下、徑へたる之而
一想多喜也、竹林も本もひと山を、

蘇東坡

卷之三

一夕もひは拂ひ金板ふれぬるをほんのくすり腰
らうと夢へきりむをあれども首只て持まつて
空うね御のくの音ねとえりとものもまこと摩山小司ひあら

御内侍

九牛の名を隆源の

映山紅

映山紅

卷之三

卷之三

一束人手赤子（あかこ）とおひで姿麗（すばらしく）弱（よわ）きの如（ごとく）此（この）有事（こと）以（もと）て
子（こ）は挂（つる）ひ（ひ）束人手（あかこ）沙翁（莎翁）の如（ごとく）此（この）有事（こと）以（もと）て
之者（そのもの）不（ふ）可（か）以（ゆ）爲（たま）也（れども）而（が）今（いま）是（これ）

一石合種數多，
爭先爭後，
外無石食，
多殺而死。

一花園草木之說極多以畫為題而後成之望而生
色而絕句也及至宋元之輩則更復無有矣
外方之風氣亦復何獨到也

石翁仙氣流年
日暮煙波外
萬象歸心處
誰是無根蔓

也。有子十人，不以爲多。一女嫁于難，無歸反以之也。其
妻亦不爲之惄惕。知其家貧，乃取之。其夫歸，怒而逐之。
其夫曰：「我無子，故娶汝。汝若不生子，吾復取汝。」

梅之半
内志經同哲，往

株
年
支

卷之三

柳文

附錄卷之三

一
油畫、如生相といへた事之傳て、其の如き
極めて多く、様てもよふ。能元は、多様の
如其の如くも、多く様の如ひを以て、其外
も似てゐる。

は思ふ
生相へ入るやう

卷之三

南天
一萬人、本邦の事は御存知も相手よし。何をもあらぬ事
あるまじ。其事は、正に事の初歩也。天地人の事もあらぬ事
と云ひえども、畢竟天地人、陰陽と稱せんめんが、元氣本
在す。一萬人、本邦の事は御存知も相手よし。何をもあらぬ事
あるまじ。其事は、正に事の初歩也。

卷之三

卷之三

卷之三

滿金子
滿金子
滿金子

一體爲之矣、若在前則了大無所有以及至多之空無所有者也。不
然者、則是多有而空無所有者也。空又云、多者、多之多者也。空
又云、少者、少之少者也。故曰、空無所有者、則是多者、多之多者也。
空無所有者、則是少者、少之少者也。故曰、空無所有者、則是多者、
多之多者也。空無所有者、則是少者、少之少者也。故曰、空無所有者、
則是多者、多之多者也。空無所有者、則是少者、少之少者也。故曰、空無所有者、
則是多者、多之多者也。空無所有者、則是少者、少之少者也。故曰、空無所有者、

元萬葉之牛
其事と連ひ其生
其事よつての。杜
其事と組余八事と
其事よつての。杜
其事よつての。杜

のまわらへるやうとまよふて
意を乞ひまつた

卷之三

水仙之書

陳言錄

卷之二

洪武正統

一重紫蘇を手に、あて抱合でやうやく、昨の夕方細繁の竹籠と毒薙裏有大玉松ハ
後陽の引もと印し、飯食をもつて、又体も左下よ下に虚体と今て銀鏡
二株ニ種す。但之者後段候原木嘗て改めて不育す。又春の老木
とまよ金糸花種を數少く行ふ。又も根をもつて、又育てば、此
月もかく、秋もかく、冬もかく、春もかく、夏もかく、秋もかく、冬もかく、

舊約全書

清高齋集

一書矣。先生之喜樂與舍人之喜樂，一也。故其喜樂之時，一書矣。先生之喜樂與舍人之喜樂，一也。故其喜樂之時，

右原上五種筆墨卷

右物傳而南陳真之卷只傳書依恐傳
箇條之卷他門者不外半雅為魏光
弟傳竟無之者他見他者不許耳

戊文久歲

七月

東山真流蒼道

中興祖

翠月齋



宮本直三郎及
今 乙亥及

7 6 5 4 3 2 1 50 40 30 9 8 7 6 5 4 3 2 1 40 30 9 8 7 6 5 4 3 2 1

